

論 文

漢訳聖書からみる西洋人宣教師の中国語

塩 山 正 純

概 要

在近代の中国，諸多西洋傳教士在語言研究方面做出了很大的貢獻；即聖經的漢譯、英華・華英字典的編纂以及官話、方言等各漢語言的研究。馬禮遜（1782-1834）是基督教來華傳教士的嚆矢。他從事第一項的聖經的漢譯《神天聖書》的翻譯工作之後，許多來華傳教士也陸續完成了諸多聖經漢譯的工程。漢譯聖經有幾種文體，《神天聖書》等早期漢譯聖經一般被分類於所謂“文理（Wenli）”或“深文理（High Wenli）”，一直到19世紀中葉1854年麥都思等出版的《新約全書》纔出現被分類於“官話”的漢譯聖經。官話聖經的正文是西洋傳教士對官話的一種研究成果，也可以說，其正文表現出傳教士們所認為的各官話的文體。再說，聖經的翻譯應該講究原文，因此，我們可以依靠原文對各種官話譯聖經正文進行對照研究。本文以麥都思《新約全書》等官話譯聖經的四個福音書的正文為核心資料，通過其與《神天聖書》以前的一些漢譯聖經類和當時的官話著作比較對照的方法，參考一些關於當時的官話南北差距的先行研究的成果，主要考察虛詞、連詞、具有各官話特徵的一些實詞的使用情況，初步探討以麥都思為代表的早期官話譯聖經文體的特徵和傳教士們在漢語研究上對官話的看法。

キーワード（關鍵詞）：漢譯聖經，麥都思，官話，新約全書

0. 本稿の資料：モリソン訳『神天聖書』とメドハースト訳『新約全書』

本稿では資料としてモリソンの『神天聖書』（1823）とメドハーストの『新約全書』（1857）

を用いる。モリソンの『神天聖書』はプロテスタントによる聖書全文の漢訳の嚆矢であること、またメドハーストの『新約全書』は顧長聲（1989）が「麥都思和施敦力南京官話譯本，儘有《新約》，上海出版。此為外國傳教士首次用白話譯經，以求出版後供南方中國平民閱讀。」と言うように、南京官話を用いて上海にて出版されたが、外国人宣教師が、とくに南方の中国の平民の閲読に供するために始めて中国語の口語で翻訳した、ということが両書を本稿の資料として用いる理由である。なお、この時期にはカトリックによる早期の漢訳聖書である『古新聖經』も存在し、台湾の利氏出版社より2013年に影印が刊行されたが、これについては本稿の考察の範囲とせず、今後の課題としておきたい。

1. 文体“文理”と“官話”について

本稿では、まずロシアのヤホントフ（1969）の中国語の文体に関するキーワード、そして幾つかの句末助詞、人称代名詞の使用状況から、モリソンの『神天聖書』（1823）とメドハーストの『新約全書』（1857）を比較対照し、漢訳聖書間の文体の差異について見ていきたい。上記ヤホントフのキーワードは、唐宋時代の文献の文体を対象に、文言、混淆体、白話（口語）に識別するために合計26個の虚詞を選定したものであるが、本稿でも時代差はあるものの文体の傾向を見るには適当と判断して目安として使用するものである。26語の虚詞は想定する文体別に以下の通りである。

文言虚詞A組：其、之（代）、以（介）、於／于、也、者、所、矣、則

B組：而、之（定）、何、無、此、乃

白話虚詞C組：便、得、個／箇、了、裡、這、底／的、着、只、兒、子

1.1 「(深) 文理」モリソン訳『神天聖書』の文体的特徴

『神天聖書』のマルコによる福音書について、ヤホントフのキーワードや文末句末助詞、人称代名詞の使用数をみると、以下の通りになる。

A

	其	之	以	于／於	也	者	所	矣	則
マルコ	332	362	108	46/41	139	171	81	59	32
全文	1449	1761	746	455/272	990	1145	546	278	301

B

	而	之	何	無	此	乃
マルコ	333	385	70	73	95	58
全文	1436	2097	374	320	592	365

文言句末助詞

	乎	哉	耶	與	歟	耳	然	焉
マルコ	62	1	0	0	1	0	0	3
全文	254	28	23	1	6	5	17	71

C

	便	得	個／箇	了	裏／裡	這	底／的	着	只	兒	子
マルコ	0	10	31/0	8	5/0	0	22	3	0	0	6
全文	16	41	99/11	36	14/1	(1)	110	8	2	0	25

また、上記以外については、人称代名詞の用法が文言の規範に忠実であり、以下の各点がその特徴として指摘できる。

(1) 一人称については、文言の用法での規範をほぼ踏襲して、“我”と“吾”の使い分けがみとめられ、聖書の翻訳者たちが文言を正確に把握していたであろうことが窺える。そして、この特徴は、とりわけ『神天聖書』で顕著である。

(2) 二人称は、時代を追うごとに、徐々に“爾”“汝”の2つに集約されていくことが認められる。

(3) 三人称は、基本的には主格、修飾格では“其”，目的格、とくに文末では“之”を使うのが大勢で、文言で最も多く使われるパターンが主流であるが、吏文で多用される“伊，伊等”が使われている。なお，“伊”は後ろに“的”をとらないし、文末にも使われない。そしてモリソンの『神天聖書』の用例には、使う対象の性格に特徴が見られる。

1.2 メドハーストの「官話訳」『新約全書』（1857）の文体的特徴（以下「麥都思（1857）」と略称）

「官話訳」『新約全書』（1857）のマルコによる福音書について、ヤホントフのキーワードや文末句末助詞、人称代名詞の使用数をみると、以下の通りになる。

A * 概算

	其	之	以	于／於	也	者	所	矣	則
マルコ	0	0	23*	0/0	0	0	多数	0	0

B

	而	之	何	無	此	乃
マルコ	0	0	3*	0	7*	2

*何“如何”のみ3, 此“彼此”が5 (“從此”2)

文言句末助詞

	乎	哉	耶	與	歟	耳	然	焉
マルコ	0	0	0	0	0	0	0	0

C

	便	得	個/箇	了	裏/裡	這	底/的	着	只	兒	子
マルコ	12	*	183/2	310	計141	179	0/938	116	21*	40	138

*“得”調査中…いずれにしても動詞の用例多 * “只”概算

上記の“(深)文理”と“官話”の各表における虚詞の使用頻度から、“文理”から“官話”へ、という文体の差異については虚詞使用数の傾向の変化からも明確に見てとれる。また、人称代名詞(代名詞)については、“文理”では多数の代名詞が使い分けの規則にのっとって使用されていたものが、“官話”では“我(們)”“你(們)”“他(們)”が統一して使用されるようになり、また“咱們”“其”“伊等”などは使われなくなっている。

2. 官話の地域差(南方官話と北方官話)と時代差(1844, 1857, 1863)について

2.1 地域差(南方官話と北方官話)

19世紀もなかば以降となって、Medhurst(1857)よりも後の時代では、南北官話の差を意識した西洋人によるものをはじめとする中国語研究の著作や教科書類も出版されるようになり、またそれぞれの著作に関する先行研究の成果を参考にすれば、かなり明確に官話の地域差の特徴が見て取れる。例えば、「関西大学泊園文庫所蔵の『官話指南』に見られる書き込み」についての日下恒夫(1974)の考察、「『官話類編』の中国語例文中の北京官話と南京官話の語彙並記」についての尾崎實(1973-1978?)その他の考察、《A First Reader in the Mandarin Dialect》(1887)と漢訳聖書の和合本についての永井崇弘(2003)の比較対照、そして『品花宝鑑』の語彙に関する地藏堂貞二(2004)の考察、さらに Absalom Sydenstricker 著 *An Exposition of the Construction and Idioms of Chinese Sentences*. に関する西澤治彦(2011)の考察等が、本稿の考察対象である各聖書の言語的特徴を明らかにする上で有用であろうと思われる。

上記先行研究、つまり永井崇弘(2003)、日下恒夫(1974)、地藏堂貞二(2004)、西澤治

彦 (2011) の南京官話に関する記述にもとづき、Medhurst (1857) を見てみると以下のような特徴が指摘できる。なお、各項にはその特徴を指摘する先行研究を示した。

(1) “～得狠 (～得很)” を避ける傾向にある (日下 (1974)) (*地蔵堂 (2004))

Medhurst (1857) では“～得狠”が12例あり、“～得緊”と“～得慌”の用例はない。

05-42 那女就起來行走那時女子的年紀纔剛十二歲眾人驚奇得狠

16-05 就走到墳墓裏去看見一個少年人坐在右邊穿着白衣婦人希奇得狠

(2) 動詞と否定副詞“沒”ではなく“沒有”とする (日下 (1974)) (*地蔵堂 (2004))

Medhurst (1857) では“沒” (計1)、“沒有” (計57) で詳細は後述するが、結果が一致している。

(3) 這兒, 那兒, 那兒—這裏 (裡), 那裏 (裡), 那裏 (裡) とする

Medhurst (1857) では全て“這裏 (裡), 那裏 (裡), 那裏 (裡)”の用例のみ。

(4) 「する」を幹一做とする。理由も幹甚麼一做甚麼とするが、「料理を作る」は做一弄 (日下 (1974))

Medhurst (1857) で、“幹”は“能幹”2例のみ。一方の“做”は77例 (複合語を含む)。「理由」については、“為什麼” (19) のみ。

(5) 介詞・連詞: 起・解・打—從 (日下 (1974))

Medhurst (1857) では“起・解・打”はいずれも用例がなく、“打從”が1例で、“從”が38例。

02-23 安息的日子耶穌打從田裡經過學生一面走一面摘穀的穗

01-09 那時候耶穌從加利利拿撒勒來到約但河受約翰的洗禮

01-10 從水裏上來看見天開有聖神好像鴿子飛下來降在耶穌頭上

(6) 動詞“給” (予想される“把, V把, V與”が見られない) (日下 (1974))

Medhurst (1857) で“把”80例, “與”2例は全て介詞の用例で, 動詞“給”17例, “V給”22例。

(7) 介詞用法では“給”が“替”に (日下 (1974)) (*地蔵堂 (2004))

Medhurst (1857) では介詞の“給”が17例で, “替”は10例で混在。

05-43 耶 - 穌嚴嚴的禁戒他們道不要叫別人曉得就吩咐人把東西^給這女子吃

06-37 耶穌說道你們^給他吃就是了學生們說道難道要我們把二十兩銀子去買餅^給他們吃嗎

01-04 約翰在荒野行洗禮傳悔罪的道理^替人家施洗可以免罪

15-17 拿紫色的袍替耶穌穿上又把荊棘編成冕^替耶穌戴上

(8) 介詞用法で“跟”が“對・和”に（日下（1974））

Medhurst (1857) で介詞“跟”は5例。“對”52例“和”74例ほぼ全用例が連詞としての用例。

(9) 禁止の副詞“別”は“不要”とする（日下（1974））（*地蔵堂（2004））

Medhurst (1857) で“別”は1例のみ。一方“不要”は36例。

01-44 說道你^要小心^別告訴人只去指給祭司看照着摩西吩咐的話去獻禮物叫他們曉得你是乾淨了

05-10 就懇求耶穌^{不要}趕他們離這地方

(10) “可”は強調でも転折でも極端に避ける 可—卻（3）・卻是（0）（日下（1974））

Medhurst (1857) で“可”の強調・転折の用例なし。一方“卻”もわずかに3例。

(11) 咱們—我們（地蔵堂（2004））

Medhurst (1857) で“咱們”は用例なし。一人称複数は全て“我們”。

(12) 助詞“哩”を用いず“呢”を用いる（地蔵堂（2004））

Medhurst (1857) で“哩”は3例，“呢”が55例。

09-42 若是坑害信我的小子犯罪這個人倒不如把磨石挂在脖子上丟在海裡還好^哩

14-63 頂大的祭司自己撕破了衣服說道還要用什麼別的見證^呢

(13) Mateer (1922) “與”+ NP + V は南京官話（永井（2003））

Medhurst (1857) で「“與”+ NP + V」は2例のみ。

14-39 耶穌又進去祈禱上帝說話^與前一樣

05-07 大聲喊道至高上帝的兒子耶穌呵我^與你什麼相干我假托上帝的名兒求你不要使我受苦

- (14) 動詞の異同 Mateer (1922) “引”は南京官話—“領”は北京官話 (永井 (2003))
Medhurst (1857) では該当するのが以下の用例のみか。

07-33 耶穌領他離了眾人到僻靜的地方用指頭探他的耳朵吐些唾沫兒抹他的舌頭

- (15) 介詞“將”は古い白話で“把”は北京の口語 (永井 (2003))
Medhurst (1857) で“將”5例に対して“把”81例。

06-53 後來擺渡到革泥撒勒的地方將船攏近岸

01-26 那邪神就把那人一扭大聲喊着出去了

02-11 我吩咐你起來把你的床抬回去罷

- (16) 《A First Reader》(1887) (南京官話)は“V着”を多用しない (永井崇弘 (2003))
Medhurst (1857) では“V着”が116例 (若干の結果補語を含む) ある。

03-34 說時就看坐着座上的人說道請看我的母親我的兄弟呵

04-38 耶穌在船梢上靠着枕头睡覺學生們把他叫醒說道先生為什麼不照應我們呢我們將要死了

- (17) 書き込みが“兒”を極端に避ける (日下 (1974))

Medhurst (1857) での“～兒”の用例は、“道兒，樣兒，話兒，一夥兒，一塊兒，空兒，枝兒，名兒，唾沫兒，一點兒，悄悄兒，雪花兒，前兒，葉兒，一聲兒，法兒” (計39)。

- (18) 大雑把に言えば、北では“兒”，南では“子”を用いる傾向がある (日下 (1974))

Medhurst (1857) でも上記“～兒”が結構使われているが，“子”が“杯子，標子，脖子，枕头，床子，肚子，兒子，鴿子，根子，棍子，果子，孩子，盒子，筐子，籃子，聾子，幔子，盤子，妻子，日子，身子，鐵鍊子，屋子，瞎子，驢子，鞋子，樣子，一會子，銀子，玉盒子，園子”など計135例ある。

- (19) 北方の“誰”と南方の“那個” (西澤 (2011))

Sydenstricker (1889) *An Exposition of the Construction and Idioms of Chinese Sentences, as found in Colloquial Mandarin.*

p 9. 3rd. Interrogative Pronouns. The most widely used are, (1). shuei (in Northern Mandarin), and na ko (in Southern Mandarin) who? Whom

Medhurst (1857) では，“誰”が4例で，“那個”が7例。

10-40 但是要坐在我的左右不是我能作主的只是上帝預備這坐位要給誰我就給誰了

12-16 耶穌問道這個錢上的相貌和這字號是誰的答道是該撒的

02-07 這個人說話豈不太過分了除了上帝以外是那個能赦人的罪呢

05-31 學生們說道你看眾人這麼擠你倒問是那個摸我嗎

16-03 大家說道是那個替我們搬開了墓門的石頭啊

(20) 比較 北方の“A比B形容詞”と南方の“A形容詞+似・起・過B”(西澤(2011))

Medhurst (1857) では、“比”(8) に対して“似・起・過”(0/0/0) は用例無し。

01-07 他說道在我後面來的一個人比我更大就是跪下替他解鞋帶我還不配呢

02-09 你想對那害癡瘋的說句話兒赦他的罪比那說句話兒叫他起來拿床出去是那一件更容易的

06-14 所以耶穌的名聲傳揚出來希律王罰比這個城裡的刑罰更容易

10-25 駱駝穿針的眼比財主人上帝的國還更容易咧

(21) 北方の“不知道”と南方の“不曉得”(西澤(2011))

Medhurst (1857) では、“知道”(1)，“曉得”(23)，“不曉得”(13) (“曉的”(0))，“覺得”(0) である。

14-68 彼得不肯承認因說道我不曉得呵我也不知道你講的是什麼話說着就走出來到了院門雞就叫勒

13-33 你們謹慎些不可貪睡要祈禱上帝因為你們不曉得這日子是幾時到呵

15-45 後來既曉得實在的情由就把尸首賜給

(22) 先行研究では南北差の特徴として指摘されているものの、**Medhurst (1857)** でもそもも用例数が無かったり極端に少なかったりする項目については、以下の通り先行研究の記述のポイントと各語彙の()内に**Medhurst (1857)**の用例数を示すにとどめる。

a) 動詞語彙の北と南の差：折(2)―斷(6)，擲(0)―搬(3)，拐彎兒(0)―轉彎兒(0)，擦(1)―抹(5) etc. (日下(1974))

b) 没―未とする → **Medhurst (1857)** では“未”が1例のみ。

09-01……我實在告訴你們站在這裡的有多少人當未死以前能觀看見上帝的國有了權柄興旺起來

c) “今天(1)，明天(0)”と“今兒(0)，明兒(0)” (日下(1974))

d) “儘管(0)”と“只管(0)”

e) “～得了”を用いない (日下(1974)) → **Medhurst (1857)** でも用例はない。

f) 顯着(0)―顯得(0)，通達(0)―曉得(日下(1974)) → **Medhurst (1857)** では

“晓得”多数。

- g) 同義語の北と南の差：喝茶（0）・喝酒（0）—喫茶（0）・喫酒（0），沏茶（0）—泡茶（0），起身（1）—動身（0），拾掇（0）—收拾（4），涮（0）—洗（3），忘了（0）—忘記了（1）（“忘記”1例あり），逛（“游逛”2例）—玩（0）（日下（1974））

2.2 時代差（2つの会話教科書とその間に位置する官話訳聖書から）

前節で提示した「地域差（南方官話と北方官話）」と多少の重複があるが、本節では、ワイリーによるプロテスタント宣教師の中国語著訳目録にも収録されている、メドハーストが著した会話教科書と息子によるその改訂版の2つの版 *Chinese Dialogues, Questions and Familiar Sentence* (1844, 1863) を比較対照の範囲に加えて、両者で共通するポイントと違いがあるポイントをそれぞれ挙げ、出版時期がその中間に位置する Medhurst (1857) 官話訳聖書との3者間で共通点・相違点をそれぞれ比較してみる。¹⁾

2.2.1 会話教科書の初版と第二版で共通する語彙の特徴

(1) 初版では、動詞“没”の用例は“没酒”1つしかなく、第二版でも“没钱”，“没人”各1例しかない。“没有”は、初版に“没有钱”，“没有铺子”，“都没有”の合計3例、第二版ではさらに増えて、“没有空兒”，“没有钱”，“没有雨伞”，“没有量”，“没有飯吃”，“没有房子住”，“没有違例”，“没有准单”，“没有錯誤”，“没有生意”などがある。

Medhurst (1857) では、“没”は用例がなく（否定副詞の1例のみ），“没有”は動詞の否定が37例（否定副詞20例）。

04-22 没有 微末的事不顯出來的隱藏的事不露出來的

05-03 那個人素常住在墳裡的 没有 人能殼用鐵鍊子去捆他

(2) 否定の副詞“没”は用例が大変少なく、初版では“没得飯食”のみで、第二版も“没帶現銀子”のみ。また、初版には“没有”の用例が無いが、第二版では、完了を否定する場合の“没有弄好”，“没有傷人”，“没有偷漏走私”，“没有開鎗”，“没有起卸”，“還沒有到”，“没有打掃”などの用例が見られる。

Medhurst (1857) では、“没”は否定副詞の1例のみで、“没有”は動詞の否定が37例で否定副詞20例。

08-23 耶穌拉着瞎子的手帶出了鄉外吐些唾沫在他的眼睛上用手摸摸他問他看見什麼 没有

11-13 遠遠的看見一顆無花果樹上面有葉就走近前看看有果子 没有 走到那裡不過是樹葉

因為結果的時候還[沒有]到

11-14 耶穌對那樹說道從今以後人家[沒]得吃你的果子了學生們都聽見這句話的

(3) 受身と使役の動詞は，“請”（“請＋人称＋動詞”）が、初版で10例、第二版で17例見られるが、いずれも“讓”は見られない。“叫”は、初版には用例が無いが、第二版では、“叫英人比他多出”，“叫人過秤”，“叫一個人相幫”，“叫他天天送兩個饅頭”，“叫他每日帶一斤牛奶”，“叫賣菜的也天天擔幾樣來”，“叫你賠”，“叫人疑心嫌棄”などの数多くの用例が見られる。また、いずれも“被”は見られない。

Medhurst (1857) では、用例数が“請”（19），“讓”（使役4／受身1），“叫”（43），“被”（28）。

13-04 [請]你告訴我們在什麼時候有這件事這事應驗的日子先有什麼預兆呢

05-12 那些鬼求耶穌道[讓]我們到這羣豬裡去

01-12 聖神[叫]耶穌到荒野去

09-17 內中有個人說道先生啊我帶了兒子來見你的他[被]神迷住喉嚨都啞了

(4) 認識を表す動詞について，“知道”と“曉得”がともに若干数見られる。“知道”は初版で1例、第二版で7例。一方，“曉得”は初版で“不曉得老爺要來”，“我聽不曉得”の計2例、第二版で“曉的”が1例見られる。また、いずれも“覺得”の用例はない。

Medhurst (1857) では、“知道”（1），“曉得”（23），“不曉得”（13）（“曉的”（0）），“覺得”（0）である。

14-68 彼得不肯承認因說道我不曉得呵我也不[知道]你講的是什麼話說着就走出來到了院門雞就叫勒

13-33 你們謹慎些不可貪睡要祈禱上帝因為你們不[曉得]這日子是幾時到呵

15-45 後來既[曉得]實在的情由就把尸首賜給

(5) 動作を表す動詞については，“幹”がなく，“做”を使った例文が数多く見られる。初版では“做工”，“做生意”，“做和尚”などを使用した例文が見られ、第二版では“做甚麼”“做奴才”“做和尚”“做甚麼”“做工”“做買賣”“做領事”“做戲僧”などが見られる。

Medhurst (1857) では，“幹”（2）は“能幹”のみで，“干”（2）も01-24 “和你有什麼相干”，05-07 “與你什麼相干”のみ。全て“做”（77）の用例である。

(6) 出発を表す動詞については，“起身”が初版、第二版の同一部分の同一の例文中に1つ出現する。一方で，“動身”は2つの版本ともに用例がない。

Medhurst (1857) では、そもそも用例が1つしかなく、“起身” (1)、“動身” (0) である。

07-24 耶穌 **起身** 到推羅西頓交界的地方到一個屋子裡不要人家曉得竟不能隱藏

(7) 共同を表す介詞はほぼいずれも“同”である。例えば、初版の“同我走”や第二版の“同我一塊兒走”などである。“跟”は第二版ではただ“跟人要”(1例)のみになる。また、“和”も第二版で“和甚麼字一個様子”と“和洋字一個様”のみ。“替”も第二版では“替他查辦”と“替我找”の2例のみ。

Medhurst (1857) では、“同”が14例で(ほか連詞が4例あり)、“和”(0)はほぼ全てが連詞としての用例。“跟”の介詞は5例。“跟”27例のうち“跟着”6例、“跟從”8例、“跟隨”5例などが計22例で、方向動詞に前置する用例も全て「付いていく」意。また、介詞の“替”は10例。

01-13 在那裡四十天讓撒但魔鬼所試 **同** 野獸住着有天使服事他

04-36 耶穌在船上學生們已經叫眾人散了就 **同** 耶穌一塊兒去有別個船同走

10-16 耶穌就抱住那小孩子用手摸着 **替** 他祝福

15-17 拿紫色的袍替耶穌穿上又把荊棘編成冕疏 **替** 耶穌戴上

(8) 連詞は大部分が“同”である。初版、第二版ともに“飯同黃薑”“黑酒酸酒同(那)三變酒”などの例文が見られる。2つの版いずれも連詞の“和”は見られない。“連”については、2つの版本間で些か違いがあり、初版では“房子盡壞連貨物燒去甚多”とし、第二版では“許多貨連房子都燒乾淨了”とする。

Medhurst (1857) では、“同”が4例で(ほか介詞が14例あり)、“連”を使う用例は5例全てが“連～都・也”での用例。また、“和”(74)はほぼ全用例が連詞としての用例。

08-35 但凡要救生命的人反倒喪失了生命為信我 **同** 福音道理喪失生命的人倒反得救生命

04-41 眾人實在驚疑彼此相問道這個是什麼人 **連** 風 **同** 海 **都** 順從他了

03-31 耶穌的母親 **和** 他的兄弟來站在外頭打發人叫他

(9) “照着”は第二版にのみ3例見られる。

Medhurst (1857) では“照着”は1例。

01-44 說道你要小心別告訴人只去指給祭司看 **照着** 摩西吩咐的話去獻禮物叫他們曉得你是乾淨了

(10) 禁止を表す副詞の“別”は、初版、第二版ともに例文が見られない。“不要”は初版に1例、第二版に4例見られる。また、“勿”は初版に3例見られる。

Medhurst (1857) では“別” (1), “不要” (37), “勿” (0)。

01-44 說道你要小心 別 告訴人只去指給祭司看照着摩西吩咐的話去獻禮物叫他們曉得你是乾淨了

05-10 就懇求耶穌 不要 趕他們離這地方

13-21 那時有人告訴你們道基督在這裡基督在那裡你們 不要 相信

2.2.2 会話教科書の初版と第二版の間で違いが見られる語彙

(1) 「儿化」の語彙については、初版には見られないが、第二版では例文が数多く見られるようになる。第二版が初版の名詞を「儿化」したものには、例えば以下の例のように、“那裡→那兒，名→名兒，實價→實價兒，時→時候兒，話→話兒，半點鐘→一會兒”などがある。第二版にはさらに“幾兒，昨兒，這兒，逛逛兒，一塊兒，閒兒，空兒”などの語彙が見られる。

〈第一版〉 那裡來的。

〈第二版〉 是那兒來的。

Medhurst (1857) では、道兒，樣兒，話兒，一夥兒，一塊兒，空兒，枝兒，名兒，唾沫兒，一點兒，悄悄兒，雪花兒，前兒，葉兒，一聲兒，法兒 (計39)

(2) 初版は“幾多”の用例が数多く見られ、このほかに“幾大”，“幾久”などもある。初版で疑問を示す“幾～”は、第二版では見られなくなり、大部分が“多少”に改められている。

〈第一版〉 幾多錢。

〈第二版〉 要多少錢呢。

Medhurst (1857) では、“幾”は疑問の用例は稀で、数の疑問についてはほぼ“多少” (8)。

06-38 耶穌說道現在有 多少 餅你們去看看學生們道只有五個餅兩條魚完了

09-21 耶穌問他的父親道害這個病有 多少 日子了答道從小時

14-57 後來有 多少 人起來亂作見證

(3) 飲食を表す動詞について、初版はすべて“食”を用いているが、第二版はこれを2種類に分け、食べる行為は“吃，喫”を用い、飲む行為は“喝”を用いている。

〈第一版〉 食飯、食完魚、食酒、食飽、食雅片

〈第二版〉 吃飯、吃過了魚、喝酒、吃飽、吃鴉片煙

Medhurst (1857) では、“食” (9) の用例は“禁口不食，禁食，飲食”に限られ、“吃，喫”は43例／1例，“喝”5例。

- 14-14 就跟他到屋子裏去告訴東家道先生問你客房在那裏可以同學生們吃節期的筵席
07-02 看見他的學生有幾個人手不乾淨便去吃飯就是不曾洗手所以責備他們
16-18 可以捉蛇喫毒沒有傷害手摸病人可以醫得好
14-25 我實在告訴你們我再不喝葡萄酒且等後來在上帝的國裡喝新的葡萄酒了

(4) 「与える」意味を表す動詞について、初版は一般的に“裨”を用いるが、第二版は“給”だけを用いる。介詞に関しては、初版は“裨”、或いは“與”を用いるが、第二版は“給”に改める。

〈第一版〉請你把幾樣綠茶裨我看。

〈第二版〉請你拏幾樣綠茶給我看看。

Medhurst (1857) では、“裨”（0），“與”（0）（以下のように別の用例あり）で、“給”（56）のみ。

05-07 大聲喊道至高上帝的兒子耶穌呵我與你什麼相干……

14-39 耶穌又進去祈禱上帝說話與前一様

15-23 就拿沒藥的酒給耶穌喝耶穌不肯吃

16-15 耶穌說道你們到普天下去傳福音的道理給萬民聽

(5) 「概ね」を表す副詞について、初版は“諒約”を用いるが、第二版では“大約”に改められている。

Medhurst (1857) はいずれも用例が無い。

(6) 不定副詞では、初版で“弗”としていたものが、第二版では全て“不”に改められている。

Medhurst (1857) はいずれも“不”の用例である。

(7) 概数を表す“～（的）光景”が、初版では例文が見られないが、第二版では4例用いられている。

〈第二版〉每担值得二拾二三兩的光景

Medhurst (1857) には用例が無い。

(8) “狠”は初版では“～得狠”（4例）の用例しか用いられていないが、第二版では、例えば“狠豐盛，狠好看，狠難，狠多”など、大変多く用いられている。

Medhurst (1857) は“～得狠”の用例のみ（12例）

05-42 那女就起來行走那時女子的年紀纔剛十二歲眾人驚奇得狠

16-05 就走到墳墓裏去看見一個少年人坐在右邊穿着白衣婦人希奇得狠

(9) 理由を尋ねる疑問詞は、初版では“為何”(4例)が使われ、第二版では“為甚麼”(4例)が使われている。

〈第一版〉為何昨天不來

〈第二版〉為甚麼昨天不來

Medhurst (1857) は、いずれも表記が“為什麼”(19)。“甚麼”1例あり(“何”は“如何”(3例)のみ)。

3. 小結 以上の比較から

モリソン訳『神天聖書』とメドハーストの1857年版官話訳『新約全書』のマルコによる福音書の本文を主な範囲とする以上の考察を通して、幾つかの特徴を指摘できる。まず、虚詞の使用頻度と人称代名詞の傾向から見ると、モリソン訳『神天聖書』が人称代名詞についてはほぼ完全に文言の使い分けの規則に依っており、虚詞も白話の要素を含むものの総じて文言的な傾向が強いのに対して、メドハーストの1857年版官話訳の文体は完全に口語的な特徴を持っており、両者の間に顕著な違いが見られることから、それぞれ“(深)文理”“官話”と称していることに首肯ける。次に、メドハーストの1857年版官話訳聖書は基本的には典型的な南京官話の特徴となる語彙を有していることが分かった。そして、同時に先行研究が指摘する北方官話の特徴を持つ語彙も若干見られた。

メドハーストの1857年版官話訳聖書については、本稿で参照した各先行研究の指摘する特徴をもとに、北京官話訳聖書の本文との間でさらに詳細に比較対照することによって、南北官話の共通点と相違点をより明確に抽出できると思われるが、これについては今後の課題としたい。

注

- 1) 19世紀初より欧米との往来の活発化によって、欧米人による欧米人のための会話集、教科書、ハンドブックなどが陸続と出版されるようになった。プロテスタント宣教師のロバート・モリソンが1816年にマカオで *Dialogues and detached sentences in the Chinese languages* を著したが、アヘン戦争(1840-1842)後に往来が益々活発化した時代の要請に応じて出版されたのが、メドハーストが1844年に著した *Chinese dialogues, questions, and familiarsentences, literally rendered into English, with a view to promote commercial intercourse, and to assistbeginners in the language* で

あり、彼の息子の改訂により1863年にその第2版が出版された。両者の内容は基本的にほぼ一致するが、時代と社会情勢の変化によって少なからぬ改訂が施されており、両者の間で変化したことと変化しなかったことを考察することで、約20年のあいだの変化の一端を見ることができる。本書の漢字の発音表記に関しては、基本的にモリソンの方法を継承しているが、無気音・有気音を区別しているのが特徴である。

参考資料・文献（出版年順）

- 雅洪托夫（1969）「七至十三世紀的漢語書面語和口語」《漢語史論集》（1986版）北京大学出版社
- 日下恒夫（1974）「清代南京官話方言の一斑—泊園文庫蔵《官話指南》の書き入れ—」《關西大學中國文學會紀要》5号
- 顧長聲（1989）「《聖經》中訳本版本簡介」《出版史料》1989年第一期
- 内田慶市（2001）《近代における東西言語文化接触の研究》関西大学出版部
- 永井崇弘（2003）「《A First Reader in the Mandarin Dialect》と南京官話について」《關西大學中國文學會紀要》24号
- 地藏堂貞二（2004）「《品花寶鑑》再考」《滋賀県立大学国際教育センター研究紀要》9号
- 西澤治彦（2011）「アメリカ人宣教師の著わした漢語テキスト—Absalom Sydenstricker 著 An Exposition of the Construction and Idioms of Chinese Sentences: As Found in Colloquial Mandarin. for the Use of Learners of the Language (1889)を巡って—」《武蔵大学人文学会雑誌》43巻2号

[付記] 本稿は2013.11.22関西大学東西学術研究所での口頭発表を手がかりに、科学研究費補助金・基盤研究(C)「西洋資料の外国語としての視点からアプローチする近代“官話”の総合的研究」（課題番号26370513）による成果を元に加筆・修正したものである。